



写真等無断転載禁止

市民の輪から自然エネルギーの街・未来への不安が 安心に変わる社会を創る

～市民発やちよ未来エネルギーの「コドモミライプロジェクト」の取組み～

一般社団法人 やちよ未来エネルギー代表理事 高山 敏朗

3. 11. 私たちの未来が変わったあの日からもうすぐ11年。この歳月ははたして問題を解決してくれたのでしょうか。未だ約2.7万人もいる避難者の方々の生活困窮の問題、福島県における小児甲状腺がん多発や健康被害の問題、廃炉作業、汚染水、各地の原発再稼働、原発を前提にしつづけるエネルギー基本政策等等、マスコミの報道等はほとんどされなくなった中でも、解決どころか、より複雑な問題を生み出し続けているように感じています。

コドモミライプロジェクトは「市民の輪から自然エネルギーの街・未来への不安が安心に変わる社会を創る」をビジョンに5つのアクションに取り組んでいます。いずれも1人1人は大きな費用をかけなくても、みんなで協力して「地産地消の自然エネルギー拡大」「温室効果ガス削減」「地域活性化」「未来へ続く街づくり」を行うことができるアクションです♪

未来を左右するこの10年。地球温暖化・気候危機・エネルギー問題の現状に対して、更に率先して希望ある子ども達の未来、地球の未来を創るべく、具体的な実践活動の一つ一つを進めていきます♪

ぜひ多くの皆様にご参加頂ければと思います！以下HPからご連絡下さい。

<https://yachiyomirai.com/>

今号（ニュースレター294号）では5つのアクションから「ベランダ発電&エコ電源イベントアクション」についてご紹介します。



市民の環から自然エネルギー社会の実現を

私たちの取組みは1人のお母さんの想いからはじまりました。原発事故による子ども達への影響、「目に見えない不安」が続いていました。仲間とともに、学校給食検査を行う署名活動で行政に働きかけ、自分たちで子ども達の過ごす場所の放射線量を測定・対処を行い、ボランティア医師にお願いし子ども達の甲状腺エコー検査を定期的実施してきました。1つ1つ目の前の不安に向き合う取組みを進めることで「安心」を取り戻すことが出来ました。

そして、もう1歩前へ。私たちは1人1人の人生、生活、想い、その現場に寄り添う取組みを進めながら、子ども達の希望ある未来へ向けて、原子力発電に関わるエネルギー問題や地球温暖化・気候変動に関わる問題等の根本解決に繋げるために、そしてもう2度とあんな悲惨な事故が起こらない社会にするために、「コドモミライプロジェクト」を立ち上げました。

項	アクション	概要
1	市民発電所アクション	ソーラー市民発電所を屋上、農地等に設置。屋根、パネルオーナー募集
2	エコ教育アクション	子ども・大人向け地球温暖化問題、ゼロカーボン、SDGs講座等を実施中
3	ベランダ発電&エコ電源イベント	ポータブルソーラー&電源の販売、貸出、イベントのエコ電源化支援。
4	パワーシフトアクション	地産地消のエコ電気を目指して電力契約切替を推進中。電気料金節約にも
5	子どもを守るアクション	子ども達の甲状腺検診等を定期開催。

脱炭素への家庭で出来る実践入門、また大規模停電等の災害対策としてポータブルソーラーパネルと蓄電池を一家に一台普及する活動を進めています。また、これらや電気自動車を活用して、様々なイベントの使用電源を100%自然エネルギーのエコ電源とすることで、地球温暖化を見据えた自然エネルギーの推進、脱炭素社会への取組みとすると共に、イベントの価値を高め、観光資源の活性化やシティプロモーションにも繋げていきます。導入頂いた方々にも電源やパネルをお貸し頂く形で一緒に参加して頂いて市民参加型でプロジェクトを進めています。

直近では、昨年12月25日～本年1月10日まで八

千代市の京成大和田駅前広場で「おおわだイルミ」と題して、エコイルミネーションが灯っていたのですがご覧になられた方はいらっしゃいますでしょうか。



おおわだエコイルミ、自然エネルギー100%で点灯

「おおわだイルミ」は駅前の使われていない市有地を活用して地域を盛り上げるべく、地元の大和田BASEの皆さんとともに、自然エネルギー100%でのエコイルミネーションに取り組みました。

年末年始をはさんで17日間、雨の日も大雪の日もあり、いろいろと課題あり点灯が懸念された日もありましたが、太陽光の蓄電電力によってしっかり点

灯。みんなで協力して1日もかかすことなく、自然エネルギー100%で京成大和田駅をエコで温かい灯で灯すことが出来ました♪

たかがイルミネーション、されどイルミネーション(^_^; 本当に多くの方々にご覧頂き、たくさん

の嬉しい声を伺いました。この温かくエコな灯を灯す事ができた事にちょっと誇らしい気持ちと市民の輪を実感する時間でした。

今月2月26日～3月6日には八千代市の新川沿いにある新川千本桜でも自然エネルギー100%でのエコライトアップを実施する予定です♪このようなエコイベントが更に広がり、未来へ続く八千代の実現とともに、自然エネルギー社会、住み続けられる街の未来、子ども達の希望ある未来の実現に向けた大切な1歩となることを心より願っています♪

子ども達の希望ある未来へ

やちよ未来エネルギー


お問合せは
QRからどうぞ

TEL : 050(5328)4767
MAIL : yachiyomirai@gmail.com

お気軽にご連絡、ご参加下さい

自然環境保護におけるビオトープ池での トンボとアメリカザリガニについて①

もう30年前の会話だが、市川市でビオトープ池を作ろうとしたら、今、池を掘る（作る）と、「ウシガエルとアメリカザリガニに占領されてしまう」とビオトープに熟知した友人に言われた。現在では、ビオトープ池などでの一番の問題は「アメリカザリガニ」であろう。

ウシガエルで言うと、市川市内の国府台小学校「プール」に今年秋のトンボ(ヤゴ)調査を行った折にウシガエルが網に入ったことには驚いた。ただコロナ禍の今年は市川市のプールでは「オタマジャクシ」がいる学校が数校ありビックリしたものである。6月調査の折のものは「ニホンアマガエル」の様だとは分かったが、国府台小のオタマジャクシは10月調査時であるので「ウシガエル」であることは間違いない。ウシガエルは駆除し難い外来種の一つでもあるが、やはり一番の難敵はアメリカザリガニである。

こうした外来種問題について、千葉県市川市でのことを阿部らは「房総の昆虫」68号(阿部・松木, 2021)で述べている。外来種や国内外来種による「被害」を述べたうえで、大柏川第一調節池緑地(市川市北方町4丁目)の調節池について「ミシシッピアカミミガメ、カダヤシ、アメリカザリガニ、ウシガエルなどの外来種が各池で生息している」に

房総蜻蛉研究所代表 市川市 互井 賢二

もかかわらず「当地では、アメリカザリガニが生息している割には、アジアイトトンボやアオモンイトトンボの個体数が多い。」これは一部の池で「市民のザリガニ釣りが許可されていることや、「ぼっけ生きもの倶楽部」が独自にアメリカザリガニの駆除活動を行っていることに加え、浅い池が多いためにサギ類などの捕食圧が働くなどにより、アメリカザリガニの個体数が低く保たれていることが理由と思われる。」と述べている。

が、他方で同じ市川市の代表的自然公園でもある大町公園・自然観察園(長田谷津)については、「ほとんどの水域でアメリカザリガニが大量に発生している長田谷津では、アジアイトトンボやアオモンイトトンボは稀にしか見られなくなっている。」「当地と長田谷津の双方を調査して筆者らはその差に驚かされた。」とその驚きを隠せないという。

そして、市川憲平が、『昆虫の自然』55(10):特集/ビオトープによる昆虫の保全号の巻頭)「総論さまざまなビオトープ」(P1-4.)の中で学校ビオトープや休耕田ビオトープなどを述べた後、最後のまとめとして、アメリカザリガニの「駆除」や「低密度に抑制することが、水辺ビオトープの成功の可否を握っている」としていることに、阿部らは「全く同感である」と諸手を挙げて賛同している。大

柏川第一調節池緑地と大町公園・自然観察園（長田谷津）の現地調査をしてのその落差（大いなる違い）について感じた驚きと、ある種切実な危機感・危機的現実が「全く同感である」！！との言葉に示されている、のだと思われる。

今は、全国どこでもこの「アメリカザリガニ」（以下、アメザリと略す）が一番の問題のようである。

多くの池でかつては浮植物や沈水植物などの水草が繁茂する池だったのに、今は水草もないとの池が結構あるようだ。市川市の



アメリカザリガニ(市川市大町公園自然観察園)
(2008年10月22日)撮影:田中正彦

じゅん菜池緑地の「じゅん菜池自然環境ゾーン」の民間管理地もその一つである。そこではジュンサイが無くなり、他の水草がなくなってから現在まで「じゅん菜を残そう市民の会」（名称変更後の名称）によるジュンサイ復活活動が30年以上も続けられ、一時は復活したかに見えたものの、アメザリによる被害に遭い、また、突然に水草が消滅するなど池には浮葉・沈水植物の水草がなくなって久しい。池に浮葉水草類を移植するもアメザリにより切られてしまう結果となり、目標のジュンサイなどの浮葉植物を移植するも失敗が続いていた。その現状から、まず「アメザリ駆除」作戦を日常的作業として行うこととした最近の歴史を概略的にたどってみよう。この30年の長きにわたり展開してきたことの一部を紹介する。

1987（昭和62）年にアメザリ問題が大きく浮上していた。「1987年以來問題となっていたアメリカザリガニにジュンサイの葉柄が千切られたことも何度かあった。その後2009年まではジュンサイの生育はままならなかったアメリカザリガニの問題が大きくなり、駆除するものの目立った効果は得られなかった。しかし、2009年から試みた方法について一定の成果を得た」と寺沢会長（当時）は報告書（寺沢・ほか、2013）で述べている部分を引用する。

新浜の話48 ～春の小川～

1988年3月になってから、それまで地表に出ていたため、昼夜の寒暖差で伸び縮みし、毎日のようにつなぎ目がはずれていたパイプラインを浅く土を掘って埋設しました。悩まされたパイプはずれがなくなって、池への揚水は順調になりました。池が干上がっていた2月のうちに、池から海へ向かう水路

「2011年4月に（ジュンサイ育成）ピット内にアメザリの侵入が認められたので、4月7日から5月4日までは従来から使用している「蟹かご※」3個を使用し、5月5日以降は従来と同じタイプのものを5個新調したものを使用し捕獲作業を開始した。」

（※「蟹かご」とは漁業で蟹を捕獲するための楕円形（長径55cm、短径48cm）の仕掛け網（網目は1cm）である。）

「捕獲のえさとして煮干しを一かごに1～2個入れて、雨天の除くほぼ毎日池南部のジュンサイ用ピットのある付近の3箇所あるいは5箇所にしかけた。24時間後に引き上げて捕獲したアメザリの個体数と体長を目測して記録した。」

この結果、2011年6月25日に捕獲するゼロになり、7月10日までゼロが続いたので、捕獲用のカゴかごは設置終了とした。その時の判断が、直近捕獲の体長が7cm以下の小さなものばかりで、ジュンサイには影響がないとの判断によるもので、確かに2012年はジュンサイも順調な生育がなされ、2013年には今までにない順調な生育がなされ、とうとう開花も見る事が出来た。

が、この時の捕獲活動は寺沢会長（当時）一人が毎日のように「かご上げ」を行い、データを取るといふ文字通り獅子奮迅の努力でなされたもので、この報告書にも、カルガモなどによる食害も切実なもので防鳥ネットを外せない問題（2010年にカルガモ12羽により浮葉を食い荒らされた）もあるなど、一人での活動継続の限界を「今後の問題」としてこの時に提起していた（寺沢・他、2013）。ちなみに、アメザリの捕獲数は、2011年4月～6月の3か月で754匹、2012年6月～10月まで5か月で198匹と大幅に減少してきている。ただ問題は、アメザリも「根絶」ではなかった点である。それでも2012年2013年の2年間は穏やかな池ではあった。寺沢も述べているように「7cm以下」＝「小さなもの」という当時の認識であった。寺沢（会長）一人の先駆的活動時期を「第一期」と仮に位置づけることにする。

つづく

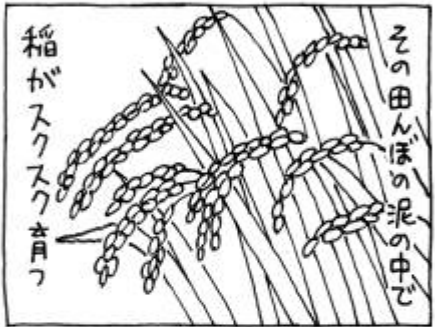
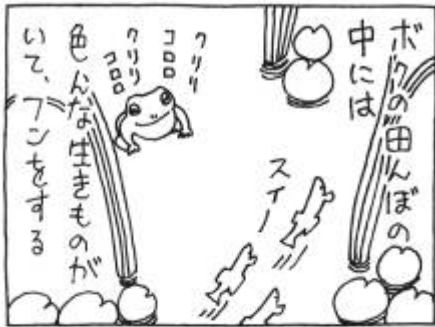
※本文章は、房総蜻蛉研究所トンボ通信第184号（2021年11月10日発行）に掲載されたものを、著者の許可を得て転載いたしました。

千葉県野鳥の会 市川市 蓮尾 純子
をつけておきました。

こう書くと何でもなさそうですが、パイプラインは延長350mもあります。せつせと浅い溝を掘って埋めるわけで、これはまあ、ひたすら坦々と続けるのみ。一方「池から海に向かう水路」のほうは、池を作る際に出た高さ1m、幅10mほどの表土の山に

スロマン

作:つやま
あきこ
⑬



つやまあきこウェブサイト
21世紀絵コジ〜 <http://www.21eco.net>

埋もれた水路を掘り直さなくてはなりません。こちらは、大柄なコンピューター技師の故寺田一哉さんが、ほとんど独力で、ほぼ1日でやりあげてくれました。寺田さんはさらにまる1日かけて、観察路を横切るところに古いダクトを埋めて、水路を埋設しました。下手からこんこんと泉のように湧き出す様子はすてきな眺めでした。

池の周囲はがっちりときれいに築かれた土手。崩したくはなかったの、考えられたのは昔ながらのサイフォン。サクションホースという陰圧でもつぶれない径5cmのホースを用い、池から土手を越えて外の水路へと水を流し出し、流し続けるのに成功。これで、池から保護区の海に向かうささやかな「春の小川」ができました。

実は、このサイフォンには意外な落とし穴があったのです。パイプはずれと同じく、設置時には予想もしなかったこと。何事もやってみないとわからないものですね。サイフォンの弱みは、なんと「気泡」。血管に空気を注入する殺人事件って、ありませんでしたっけ。管内の水流は、空気の泡に遮られると止まってしまいます。気泡は、池で大発生した植物プランクトンが光合成で出す酸素が中心らしい。晴れて気温が上がってくると、泡の発生は盛んになり、「泡出し」は2、3日に1回は必要な作業になりました。ありがたいことには池の中での浄化が進んで下池の水質が安定し、藻類の大発生がめったに見られなくなったことで、1989年夏には「泡出し」の必要はほとんどなくなりました。

こんなささやかな「春の小川」でも、海からのお客さまが入ってきてくれました。1988年5月19日夕刻、来合わせた中学生の阪本卓也君を誘って、保護区に入りました。観察路の下に埋められたダクトをいったん掘り上げて、15cmほど深くしようという計画。主人とふたりでなんとかなると思ったのだけれど、泥のついた廃材やダクトの重さはとても私の手に負えず、空手できたえた阪本君が頼もしかったこと。掘り上げたダクトの下小さな水溜まりで、何かがよろっと動いた！これがなんと、ウナギの赤ちゃん。海から流れを伝って上がってきたのです。

もっとずっと後になって、陸から海に向かう淡水の流れが魚やカニなどにとってどれほど貴重なものを何度も目のあたりにすることができました。干潟に真水が導入されたとたん定着し、増えてきたウラギク湿地のトビハゼ。流れに沿って進出してきたクロベンケイガニ。きわめつけは、流れをさかのぼる稚アユの群れ。その最初の感動の出会いが10cmほどのかわいらしいシラスウナギでした。

<編集部より訂正のお知らせ>
 ニュースレター1月号(293号)に掲載した「都心カラス調査に参加して」の本文中の数値に間違いがありました。これは参加者に配信された速報値の速報を元に執筆したため、正しくは次の数値になります。
 カラス個体数：自然教育園 24→25、明治神宮 1576→1580、総数 2780→2785、参加者数：56→54。これにともない2015年からの減少数・減少率も修正されます。

【発送お手伝いのお願い】ニュースレター2022年 3月号(第295号)の発送を 3月7日(月)10時から千葉市民活動支援センター会議室(千葉市中央区中央2-5-1 千葉中央ツインビル2号館9階)にておこなう予定です。ただし新型コロナ感染の拡大状況によっては中止する場合がありますので、お手伝いいただける方は事務局(小西 090-7941-7655)までご連絡ください。

あなたも入会しませんか キリトリセン

住所〒 _____

ふりがな 氏名 _____ 男 女 Tel _____

E-mail _____ FAX _____

編集後記: 学校給食に有機米や野菜を使う地域が増えました。2月4日の朝刊で、有機農業の生産者などに資金繰りや税制面で支援する制度の創設が今国会に出されると読み、期待しています。さて、谷津田の一筆箋が好評です。ヒメクグやカヤツリグサ、オモダカやコブナグサなど、谷津田では何気ない植物の可憐で美しいこと。希望者にお分けします。 mud-skipper ♀



【活動報告】

＜下大和田での活動＞

写真：田中正彦

第264回 下大和田谷津田観察会とゴミ拾い&生物多様性ってなかに

「いのちのにぎわいとつながり連続講座」第1回「イノシシ被害が増えています」

報告：佐藤遥

2022年 1月 9日 (日) 晴れ

今年一番最初の活動は自然観察会でした。千葉市猟友会の相川さんをお招きして下大和田周辺地域に出発するイノシシのお話を聞きながら YPP の拠点から下流の鹿島川本流までの下大和田谷津田を野鳥の観察もしながら散策しました。

猟友会の相川さんは下大和田町の出身の方で下大和田谷津田にも詳しく昔は二反田と呼ばれていたこの辺りの耕作放棄地の小川でメダカ取りなどしていたそうです。猟友会ではイノシシの罠などの設置もこの周辺を担当しているそうで、どの様な場所に仕掛けるか、どんな場所を通るか、もっと大きな範囲でどこをめぐらにして移動を行っているかなど地図を用いて丁寧に説明してくれました。罠も実際に見せて頂きました。

冬のこの時期しか行く事の出来ない鹿島川本流までの自然観察会ルートの間地点でねぐらと思われるポイントも立ち寄ったり、葦原のイノシシの通り道を観察してみたりしながら本流との合流地点から折返して戻ってきました。

午後は1度解散した後、今回参加の運営委員のみなさんと伊勢戸銘木店で持参のお弁当を食べた後から近隣の道路のごみ拾いをみんなで行いました。

確認した野鳥 23 種

参加者 14 名 (大人 13 名、小学生 1 名)



森と水辺の手入れ「畦の補修」 2022年 1月16日 (日) 晴れ

報告：平沼勝男

畦の補修を実施しました。

補修に入る前に全員で畦の現在の状況の確認と、補修についての説明をしました。ついでにの川の水位を左右する、花沢さん田んぼ横の水路の見学と、水位の調整について話し合いました。

畦の補修は2か所です。川に接する緑米田んぼの川側と、同じく緑米田んぼの水路側です。この二つの畦は、補修に至る原因が異なります。緑米田んぼの川側が永年、田んぼ側からの水の流出が原因で畔が細り、且つ低くなってしまいました。

最近では雨のたびに田んぼからの水がここを乗り越えて川に入るようになっています。川側に長さ1.8mの丸杭15本と1mの角杭4本の計19本を、おおよそ10cm間隔で打ち込みました。杭を入れた場所はもとの畦のあった場所を想定しています。

畔と杭の並びの隙間には土のうを入れました。こうすることで畔の幅は以前のものに復元されました。さらに、板を入れて、泥を畔の上に乗せて高さを増しました。あとは乾けば完成です。杭はすべて切らずに打ち込みました。特に1.8mの丸杭15本のガードは固く、丈夫な畔になってくれると思います。



参加者 5 名 (大人 5 名)

臨時森と水辺の手入れ「屋根の修理」 2022年 1月22日 (土) 晴れ

報告：田中正彦

昨年12月22日のキノコのぼだ木伐採時に壊れた、道具小屋の屋根修理を実施しました。

2本の折れた梁を交換し、廃材を使って破壊された横壁を作り直しました。最後にトタンを張り、作業開始から2時間ちょっとで修理を終えました。 参加者3名 (大人3名)



before

after

＜小山町での活動＞

☆ 1月期の活動 報告：たんぼぼ

○ 小学校の味噌仕込み危うし！それでもお味噌は造る方向で模索！

コロナ禍第4波が落ち着いて安心していたのも束の間、新たな変異株の来襲に伴って、1月21日～2月13日の予定で県内全域に蔓延防止等重点措置が適用されました。県内小学校にも学級閉鎖措置がとられた例も目立ち始め、残念ながら今年度も子供たちの味噌仕込み体験は中止することとなりました。

それでも、子どもたちにお味噌を届けたい！という思いは、先生方もスタッフも一緒でした。先生方とスタッフで味噌仕込みを行い、その様子の動画とともに子供たちにお味噌を届けられないか模索しています。1月29日には

大網の藤屋さんに糶にするお米を託し、スタッフの体調・行動管理の厳格化が進められています。無事、この難局を乗り越えられますように！

○第 200 回 小山町 YPP、田作り(畦の整備 2) 1月15日(土)

1月に入ると小山では田んぼが凍る日々が続いていました。6日には10cm近い積雪もあり、すっかり冬の静けさに落ち着いている最中にありました。田んぼも畦も至る所が凍っていて、鍬が入らない状態でしたが、山からの湧き水の通る、おおほたる田んぼ山側の水路は凍りません。そこで、湧き水が田んぼにうまく回る様に、その水路の整備を行いました。例年2月には赤ガエルの産卵も始まります。水回しと水漏れ対策をしっかりと施して、その時を迎えたいものです。

参加者2名(大2人名)

【谷津田・季節のたより】

＜下大和田町＞ 報告：田村光範

- 1月6日 田んぼに雪が積もる。稲株に雪が乗って白ウサギのように見える。
- 1月14日 エナガの群れが杉林の中で樹皮に生みつけられ虫の卵をついばんでいた。
- 1月17日 イノシシ侵入、YPPオダ小屋脇から侵入して、マイ田んぼの方まで広く畔を壊される。
- 1月19日 耳を澄ますとカサカサとアカハラの落ち葉返しの音が静かな谷津田に聞こえてきた。
- 1月29日 アカガエルを畔近くで見かける。そろそろ産卵が近いのかな？

＜小山町＞ 報告：赤シャツ親父

- 1月前半～半ば 6日の積雪以降、次第に寒さ緩み、16日は暖かく感じる朝、冬鳥レギュラーは漏れなく現れ漫ろに活動。コゲラが老木を盛んに叩く音が響く。18日朝は田んぼ脇の道にトラツグミがちょこんと鎮座。おもむろに動いては、路地わきの落ち葉下を盛んに索餌。
- 1月後半 19日には寒さが戻り22日には全面凍結していた田んぼ、以降、次第に寒さ緩み、28日に田んぼの氷はほぼ解けた。29日朝は穏やかな晴れ、エナガ、カシラダカ、アオジ、シジュウカラは群れで飛来、カケスが騒がしく登場、モズは枝と田んぼを何度も往復。

【イベントのお知らせ】

主催：NPO法人 ちば環境情報センター

連絡先：小西 TEL.090-7941-7655, E-mail: yatsudasukisuki@gmail.com

＜下大和田谷津田＞

・森と水辺の手入れ(実施日注意)

日時：2022年 2月19日(土) 9時45分～12時 雨天中止

内容：ほだ木にシイタケなどキノコ類の植菌作業を行います。

持ち物：マスク着用、長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、バッテリー式電動ドリル(あれば)

参加費：無料

・第266回 下大和田谷津田観察会とゴミ拾い

日時：2022年 3月6日(日) 9時45分～12時 雨天決行

内容：ニホンアカガエルの卵塊数カウントをしながら春の兆しを求め、谷津田を巡ります。

持ち物：マスク着用、筆記用具、飲み物、長袖長ズボンの服装、長靴(通常の)、帽子、あれば双眼鏡、ゴミ袋、午後活動する方は弁当、敷物

参加費：100円(小学生以上)

＜小山町谷津田＞

・第201回 小山町 YPP 「畦の整備3」

来年度の米作りを前に冬の間、十分時間をかけてしっかりと田作りを行います。

日時：2022年 2月26日(土) 10時00分～ ☆小雨決行

場所：りんどう広場

※ 一般の方の参加も若干名受付ます。

参加ご希望の方は、tomizo_i@nifty.com 赤シャツ親父 までご連絡下さい。

＜その他＞

・生物多様性ってなかに「いのちのにぎわいとつながり連続講座」第2回

初めての谷津田 キックオフフォーラム

日時：2022年 2月26日(土) 13時30分～15時50分

基調講演：つながる 生物多様性の大切さ(講師：原慶太郎さん<東京情報大学教授>)

その他：保全活動紹介、谷津田クイズなど

会場：損保ジャパン千葉ビル1階 第一会議室(千葉市中央区千葉港 8-4)

参加費：無料

